

## 「西方の人」の運命と美（その二）

高田 瑞穂

### （三）「永遠に超えんとするもの」

「西方の人」第三章は、「聖霊」である。芥川は、ここで「聖霊」とは「永遠に超えんとするもの」であると断定する。全文を引く。

「我々は風や旗の中にも多少の聖霊を感じるであらう。聖霊は必ずしも『聖なるもの』ではない。唯『永遠に超えんとするもの』である。ゲエテはいつも聖霊に Daemon の名を与へてゐた。のみならずいつもこの聖霊に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖霊の子供たち

は——あらゆるクリストたちは聖霊の為にいつかは捉はれる危険を持つてゐる。聖霊は悪魔や天使ではない。勿論、神とも異なるものである。我々は時々善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見るであらう。善悪の彼岸に、——しかしロムプロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髓の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた。」

この短い一節を前にして、早くも私は、筆を置き、目を閉ざさざるを得ない。私は、いつ、どこで、「善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐる」のを見たであらうか。そもそも芥川の「永遠に超えんとするもの」とは何か。

超越と内在との問題は、人間の思惟の極所に常に在り統

ける永遠の課題の一つである。真理は、人間世界を超越したものが、人間世界に内在するものか、古代ギリシア以来の根本問題であった。周知の通り、プラトンにおけるイデアは、超越的なるものであるのに対して、その弟子アリストテレスにとっては、実体として人間に内在するものであった。こういう対立の生じた時が紀元前四世紀であったとしたら、その対立を内包したヘレニズムが何らかの形でヘライズムに投影しないはずはない。神を超越的に考える有神論的傾向と、内在的に考える汎神論的傾向とは、早くからキリスト教にも内在し、それが今日にまで尾を引いて、カール・バルトの超越的神学を一方に生み、他方にアドルフ・ハルナックの内在的神学をも誕生せしめたのであった。総じて、超越的立場は二元論的であり、内在的立場は一元論的である。前者は人間の生に対して否定的であり、後者は逆に肯定的であった。いわゆる三位一体論にも、超越的と内在的との対立のあることも、明白な事実である。

芥川という「永遠に超えんとするもの」とは、芥川にとって、超越的なるものなのか、内在的なるものなのか。「聖霊は悪魔や天使ではない。」と告げられ、「勿論、神とも異

るものである。」と断じられてはいるけれども、「聖霊」の性格はいまだ必ずしも明確とならない。それを明確化する一つの手がかりとして、私は超越と内在とに触れたのであったが、依然として「風や旗の中にも多少の聖霊を感じるであらう。」の謎はとけない。

私は、福音書に帰る他はなきそうである。

「イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。」(『マタイによる福音書』一一一八)

「御使が答えて言った、『聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。』(『ルカによる福音書』一一三五)

「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはとのように自分に下って来るのを、ごらんになった。すると天から声があった、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。』(『マルコ

による福音書』一一九―一二一)

共観福音書における「聖霊」は、総じてイエスの全体を支えた神の力であった。『ヨハネによる福音書』の場合は、多少の相異が見られる。ここでは、「聖霊」は「真理の御霊」とも言われている。それは「父のみもと」に去ったイエスが、「父のみもと」からつかわした「助け主」であった。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。」(一一四―一六・一七)

「これらのことは、あなたがたと一緒にいた時、すでに語ったことである。しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」(一一四―一五・二六)

「聖霊」という概念一つに關しても、例えばアウグステイヌスの「三位一体論」、「聖書」は「聖霊」の言葉なりと観じたルターの主張等々それぞれに個性的な主張の数々が

歴史的に展開したことを思うと、そういう「聖霊」について、私は何を言う資格もないであろう。そのことは、究極的には芥川の場合もほぼ同じであっただろう。私は、芥川の内的風景を浮び上がらせることだけを考えているのであるが、それも容易にできそうにない。ここまでで、多少明らかになったと思うことは、芥川の「聖霊」が、共観福音書のそれよりは、ヨハネの場合により近いということである。しかし、マルコの場合とも、無関係ではない。芥川は、四福音書中、『ヨハネによる福音書』と『マルコによる福音書』とに、特に深い関心を持ったにちがいない。

芥川の「聖霊」すなわち「永遠に超えんとするもの」は、ほぼ、ヨハネの伝えた「助け主」であったであろう。だからこそ彼は、「聖霊の子供たちは――あらゆるクリストたちは」と言うことができたにちがいない。同時に、その「あらゆるクリストたちは聖霊の為にいつかは捉はれる危険を持つてゐる」と語ったとき、芥川にとって「聖霊」とは明らかに超越的存在であった。だから、芥川の内に、先に少しくふれた超越と内在とを一つに結ぶ、少くとも一つに結ぼうとする願望のあったことだけは、ほぼ明らかである。「聖霊の子供たち」は、本来超越的なる神の力によ

って「捉はれる危険」を宿命とした、換言すれば、超越的な神の力を自らに見出ださねばならない存在であったであろう。そういう宿命に目覚めたとき、人間はおのずから「永遠に超えんとするもの」となる。一切の現実、一切の現実的悲喜を捨て去って、神の呼吸のまにまに生きねばならない。そこに一の人間の悲劇を見た芥川だったであろう。そうだとすると、芥川における「永遠に超えんとするもの」とは、共観福音書とも、ヨハネのそれとも次元を異にした、より人間的な概念だったにちがいない。そのことを暗示したのが、ロムプロゾオの引用であったと思う。

「ロムプロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髓の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた。」という芥川のことばは、明らかにロムプロゾオの『天才論』（一八六四）を指している。周知の通り、天才は癲癇なりが、ロムプロゾオの主張であった。芥川にとって、「聖霊」のイメイジ、むしろ「聖霊の子」のそれは、ほぼ「天才」であったと考える可能性もここに見出だされてよいであろう。一度、そこに思いが及ぶと、逆に、そのことは既に芥川その人によって、くりかえし明示されていることに気付く。「西方の人」に限っても、次の如くである。

「クリストは僅かに十二歳の時に彼の天才を示してゐる。」（第十三章）

「彼の天才は飛躍をつづけ、彼の生活は一時代の社会的約束を踏みじつた。」（第十四章）

「彼はそこでも天才だったと共にやはり畢に『人の子』だった。」（第二十七章）

「肉体を失つた彼の世界中を動かすには更に長い年月を必要とした。その為に最も力のあつたのはクリストの天才を全身に感じたジャアナリストのパウロである。」（第二十五章）

「勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。」（第三十六章）

「聖霊の子」を「天才」を宿した「人の子」と考えると、ゲエテを「聖霊の子供たち」の一人と見ることは何の矛盾も感じなかつたであろう。

「我々のゲエテを愛するのは唯聖霊の子供だった為である。」（『西方の人』第三十六章）

ゲエテは「聖霊の為にいつかは捉はれる危険を持つてゐる」、そして「捉はれた」、一人の「天才」であった。

そのことより先に、「ゲエテはいつも聖霊に Daemon の

名を与へてゐた。」という表現を注視すべきであつた。晩年の芥川の内に、ゲエテへの最後の強い関心のあつたことは、無視できない事実である。そのことの実証となるものはいくつかある。後にもふれることになる。殊に「ファウスト」は「西方の人」の表現そのものにある影を落していたのであろう。

「理性や学問という

人間最高の力を軽蔑するがいい。

魔法やまやかしに血道をあげて、

いつわりの精神をどこまでも増長させるがいい。

そうなりや、どっちみち、こっちのものだ。

あの男は運命から、前へ前へと

しゃにむにすすんでゆく精神をさすけられた。」(大山

定一氏訳による)

第一部「書齋」におけるメフィストが、ファウストから血の契約書を取った、勝利の宣言ともいふべき表白の一節である。そこでメフィストは、ファウストを「運命から、前へ前へと／しゃにむにすすんでゆく精神をさすけられた」男と断定する。ファウストは、正しく「永遠に超えんとするもの」である。そういうことばの問題に止まらな

い。もう一つ「書齋」からの引用によって、メフィストに血の契約書を渡したファウストの心情ないし生自体が、やはり、晩年の芥川のそれにある深いつながりを持ったにちがいないという想像の根拠としたい。メフィストが「むく犬の正体」として始めてファウストの前にその姿を現わす直前の、ファウストの心情の告白である。

「ああ、しかし、もう何とも思つても

この胸からは満足がわいて来ぬ。

なぜまた生のながれが、こう早く涸れて

おれたちは渴になやまねばならぬのか。

だが、これは、おれが何度も経験してきたことだ。

穴をうずめる方法は、すでにわかっている。

すなわち、超自然的なものを尊敬しようとすること

だ。

神の啓示にあこがれることだ。

おれは新約の啓示ほど、

尊く美しく光りかがやいているものはあるまいと思

う。

さっそく原典をひらいて、

素直な感じのままに

神聖な本文を

おれの好きなドイツ語に訳してみよう。」

芥川の最晩年も、「もう何と思つてもこの胸からは満足がわいて来ぬ」日々であつたにちがいない。遺書の一つ「闇中問答」も、そのことを暗示する一つの証拠である。

「或声 人生はそんなに暗いものではない。」

僕 人生は『選ばれた少数』を除けば、誰にも暗いのはわかつてゐる。しかも又『選ばれた少数』とは阿呆と悪人との異名なのだ。

或声 では勝手に苦しんでゐろ。お前は俺を知つてゐるか？ 切角お前を慰めに来た俺を？

僕 お前は、犬だ。昔あのファウストの部屋へ犬になつてはいつて行つた悪魔だ。」

言うまでもなく晩年の芥川の分身「僕」は右の引用に次いで、「或声」に対して「お前は僕等を超えた力だ。僕等を支配する Daimon だ。」とも言っている。大分横道にそれたようである。

芥川の「永遠に超えんとするもの」が、「永遠に守らんとするもの」の対局に置かれているにも多少ふれる必要があろう。しかし、「西方の人」第二章「マリア」に關

する「永遠に守らんとするもの」には、それほどの飛躍的思惟はない。もともと、その実体が人間であるからである。ただ、芥川にとってマリアが「永遠に女性なるもの」であるに止まらず、「あらゆる男子の中にも」内在するものとして広げられている点に留意すればよいであらう。

「クリストの母、マリアの一生もやはり『涙の谷』の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた。世間智と愚と善徳とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。ニイチエの叛逆はクリストに対するよりもマリアに対する叛逆だつた。」

第二章後半のこの部分に、芥川の実感もこめられている。芥川は、もちろんニイチエの「運命の愛」を認めたであらう。しかし「涙の谷」を歩き続けたマリアの「忍耐」にも、ある共感を持ったにちがいない。そのことは、「続西方の人」第八章「或時のマリア」においても明らかである。

「美しいマリアはクリストの聖靈の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。」